

1に示す。ほとんどの分析値を包含するようにして大庭寺領域を描いてあり、余草里領域と比較してある。領域を長方形で描いてるのは描き易いためであって、とくに意味はない。したがって、領界を定量的に示している訳ではない。それでも、他の窯の領域と比較する上には十分役に立つ。大庭寺領域は余草里領域に重複するが、余草里領域の一部に重複するに過ぎないので、両者の相互識別の可能性はある訳である。図2は図1と同じRb-Sr分布図上に、今年度分析した小型器種類を分布させたものである。ほとんどの試料は大庭寺領域に分布しており、しかも、その分布位置も両者はほとんど同じであることも図1、2を比較すればわかる。強いていえば、小型器種類の方がSr量が少ない側に偏って分布していることがわかる。

図3には同様にして、今年度分析した小型器種類のK-Ca分布図を示す。大庭寺領域は昨年分析

したTG-232号窯の裏類の分布値に基づいて描かれたものである。ほとんどすべての小型器種類もこの裏類領域に分布することがわかる。図1～3をみて、TG-232号窯の小型器種類も裏類とほぼ同じ胎土であることが推察される。そこで、両軸に裏類および小型器種類の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値（それぞれ、 D^2 （裏）、 D^2 （小型器種）

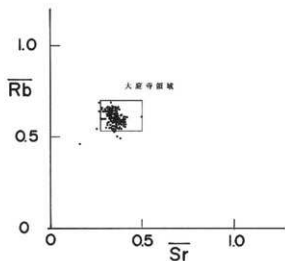


図2 TG-232号窯出土須恵器（小型器種）のRb-Sr分布図

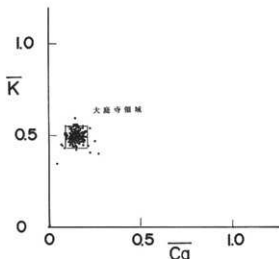


図3 TG-232号窯出土須恵器（小型器種）のK-Ca分布図

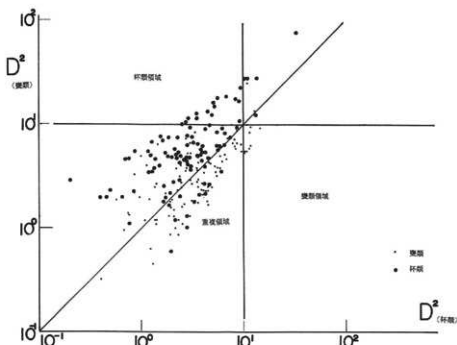


図4 TG-232号窯甕類と小型器種の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr 因子使用)

で示す)をとった2群間判別分析図を図4に示す。予想どおり、両方の試料のほとんどは重複領域 [D^2 (甕) ≤ 10 , D^2 (小型器種) ≤ 10] に分布する。中央に斜めに引かれた直線は両者の理想境界線である。統計的にみて等価な2つの母集団間の境界線となる。甕類、小型器種類の試料数はそれぞれ、100点ずつであり、しかも、K, Ca, Rb, Srの各元素のばらつきも両者とも類似している。したがって、甕類と小型器種類は統計的にみて互いに類似した母集団といえる。昨年分析したTG-231号窯の甕類とTG-232号窯の甕類もほぼ等価とみられる母集団であり、しかも、両者の全試料は理想境界線に混在して分布した。このことから、両者の素材粘土は全く同じであり、したがって、同じ粘土採掘所で採取した粘土を素材として使用したものと判断された。それに対して、図4をみると、両者の試料はおおよそ、理想境界線に沿って分布しており、同質の粘土を使用したことがわかるが、昨年度のデータのように密集しない。少しばらけて、理想境界線付近に分布している。このことは甕類と小型器種類の素材粘土は同質であるとはいえ、必ずしも、同じであるとはいえないことを示している。窯周辺で粘土を探索すると、粒子が細かく密な粘土が分布しているところがあるかと思うと、少し離れたところでは砂粒が混じった粘

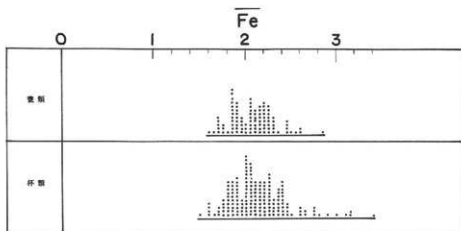


図5 TG-232号窯出土甕類と小型器種のFe因子の比較

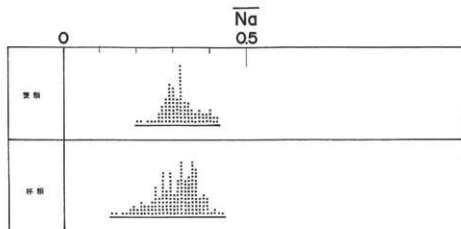


図6 TG-232号窯出土甕類と小型器種のNa因子の比較

土も分布している。これらの粘土を分析すると、同質であるが、必ずしも、びたりとは一致しない。同じ母岩から生成した粘土に違いないのであるが、ごわずかの化学特性のずれがあるのである。このことは母岩の不均一性によるのか、それとも、風化過程の違いによるものなのかよくわからない。ただ、陶芸家によると、砂まじりの粘土を素材とすると、大物の甕類は上手く焼成できるといふ。このことから、小物の小型器種類では粒子の細かい密な粘土を素材として使用し、大物の甕類には砂まじりの粘土を選択して製作した可能性が十分考えられる。この結果が図4に示すような結果を生むにいったと考えられる。この考え方を支持するデータとして、FeやNaなどの他の因子でも甕類と小型器種類は

類似しているはずである。K, Ca, Rb, Sr 因子のうち、とくに、Ca, Sr 量にみられる若干のずれが砂粒に基因するのである。そこで、次に、Fe 因子と Na 因子について変類と小型器種類と比較してみた。図5と図6にはそれぞれ、Fe 因子、Na 因子について両者を比較した。分布範囲もピークがでる位置も両者はほとんど同じであり、予想どおり、両者は類似していることがわかる。

このようにして、TG-232号窯の小型器種類の胎土は変類と同質ではあるが、必ずしも、同じとはいえないことがわかった。日本における須恵器製作の初期の段階から、大物と小物の製作において、素材を使い分けていた訳である。日本人のみの工人集団でこのような高度の技法を使い分けることは出来なかったであろう。高度の技法を身につけた渡来の技術者集団に指導されてはじめて、このような技法も朝鮮半島から渡来したのであろう。このことは大庭寺窯群からは形式上は陶質土器と区別のつかない須恵器が数多く出土していることも矛盾しない。大庭寺窯群では朝鮮半島からの渡来技術者集団が直接、須恵器製作に関わったのであろう。

最後に、当然のことではあるが、今回分析したTG-232号窯の小型器種類の胎土も陶質的であることを示しておこう。

今回は陶邑群と伽耶群の間の2群間判別分析を試みた。伽耶群としては高霊の内谷洞窯と昌寧の余草里窯群をとり上げた。陝川の礪溪堤窯の陶質土器にはCa, Sr 量がともに多く、陶邑群の須恵器の化学特性とは異なるが、内谷洞窯や余草里窯群の陶質土器の化学特性とも少し異なる。これを伽耶群に含めると、ばらつきが大きくなり過ぎるので、今回は含めなかった。伽耶群と陶邑群の2群間判別の結果は図7に示されている。重複領域に分布する試料も多いが理想境界線を境に両群の試料はほぼ分かれて分布していることがわかる。それでも、理想境界線をのり越えて互いに相手側の領域に分布しているものもあり、ある程度の誤判別の確率があることがわかる。このことは古墳出土須恵器の産地推定をする上には注意を要する。

この図を活用すると、大阪府下の遺跡から出土した硬質土器の中から陶質土器の可能性のあるものを見出すことができる。図8には今回分析した小型器種類をこの分布図上に分布させたものである。伽耶領域 [D^2 (伽耶) ≤ 10 , D^2 (陶邑) > 10] に分布する試料は1点もなく、陶邑領域 [D^2 (陶邑) ≤ 10 , D^2 (伽耶) > 10] に分布するものが5点、大部分の試料は重複領域に分布するがそれも、理想境界線よりも陶邑側に分布する。伽耶側に分布するものも10点ばかりあるが、Rb-Sr 分布図やK-Ca 分布図でほとんどの試

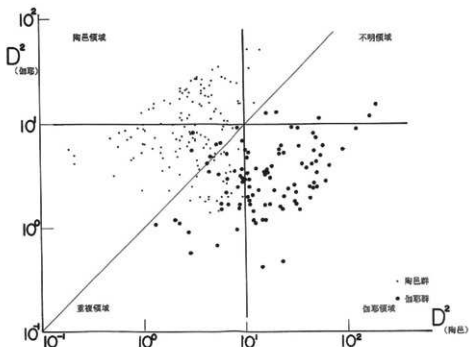


図7 大阪陶邑群と加那群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr 因子使用)

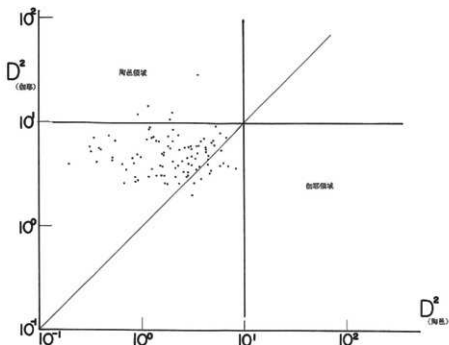


図8 TG-232号窯出土硬質土器 (小型器種) の胎土

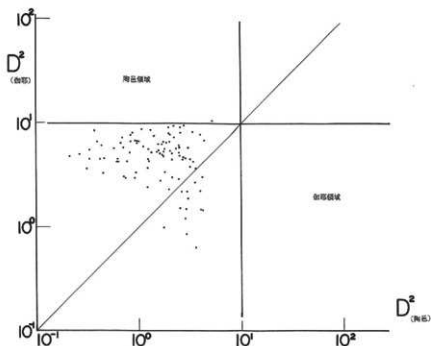


図9 TG-232号窯出土硬質土器(甕類)の胎土

料が集中して分布しているところから、これらはいずれも同じ場所で製作された製品と判断すると、これら10点は伽耶群と誤判別されたものと解釈され、今回分析した小型器種類はすべて、陶器産であると推定される。

図9には昨年分析した甕類の分析値をこの判別図上にプロットしたものである。やはり、伽耶領域に分布したものは1点もなく、陶器領域に分布したのも1点に過ぎないが、大部分は重複領域で、理想境界線の陶器側に分布した。この点で小型器種類とも類似するが、小型器種類よりも甕類の方がCa, Sr量がやや多く、その分だけ、伽耶領域に近づいた訳である。甕類もRb-Sr分布図やK-Ca分布図では集中して分布することから、いずれも同一場所で、製作された須恵器と考えられ、図9ではこのように分布するが、同一場所で生産されたものと考え、やはり、陶器的胎土をもつと結論されよう。伽耶産と判断するには少し無理がある。

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.525	0.125	1.980	0.659	0.311	0.288
2	0.472	0.190	2.900	0.491	0.377	0.346
3	0.494	0.150	1.900	0.583	0.344	0.390
4	0.467	0.141	2.370	0.544	0.335	0.348
5	0.488	0.143	2.740	0.570	0.362	0.312
6	0.462	0.160	2.420	0.543	0.354	0.257
7	0.465	0.110	2.160	0.597	0.280	0.294
8	0.513	0.086	2.080	0.636	0.263	0.215
9	0.346	0.044	2.390	0.456	0.163	0.131
10	0.464	0.173	2.340	0.541	0.385	0.334
11	0.481	0.158	2.370	0.580	0.354	0.250
12	0.522	0.149	2.260	0.571	0.328	0.377
13	0.436	0.141	2.190	0.560	0.342	0.173
14	0.487	0.168	2.490	0.580	0.383	0.318
15	0.486	0.116	2.100	0.602	0.293	0.286
16	0.514	0.093	1.910	0.687	0.257	0.199
17	0.516	0.170	2.030	0.623	0.358	0.337
18	0.466	0.148	2.150	0.577	0.319	0.177
19	0.435	0.155	2.010	0.531	0.356	0.285
20	0.517	0.164	1.820	0.657	0.373	0.354
21	0.520	0.161	1.820	0.647	0.375	0.337
22	0.472	0.126	2.800	0.552	0.325	0.349
23	0.471	0.140	2.050	0.581	0.314	0.330
24	0.540	0.156	2.150	0.600	0.346	0.363
25	0.483	0.123	1.720	0.664	0.320	0.274
26	0.564	0.144	1.990	0.641	0.322	0.270
27	0.518	0.148	1.960	0.614	0.335	0.327
28	0.497	0.125	2.040	0.640	0.305	0.305
29	0.533	0.172	2.220	0.616	0.346	0.378
30	0.557	0.140	2.330	0.630	0.318	0.285
31	0.547	0.152	1.850	0.660	0.361	0.310
32	0.502	0.186	2.580	0.568	0.391	0.330
33	0.503	0.155	1.750	0.586	0.367	0.376
34	0.496	0.148	2.210	0.641	0.321	0.280
35	0.480	0.142	2.260	0.581	0.386	0.350
36	0.520	0.134	1.800	0.612	0.373	0.363
37	0.531	0.127	2.060	0.657	0.321	0.292
38	0.513	0.186	2.170	0.622	0.392	0.272
39	0.469	0.115	2.200	0.588	0.359	0.271
40	0.595	0.144	2.010	0.657	0.343	0.287
41	0.515	0.153	2.000	0.578	0.342	0.356
42	0.435	0.136	2.220	0.549	0.304	0.163
43	0.437	0.068	1.780	0.542	0.247	0.193
44	0.497	0.156	2.390	0.567	0.414	0.360
45	0.512	0.158	1.620	0.648	0.374	0.313
46	0.520	0.171	2.040	0.584	0.336	0.393
47	0.495	0.133	2.130	0.643	0.291	0.320
48	0.502	0.134	1.920	0.661	0.353	0.354
49	0.469	0.144	1.870	0.606	0.330	0.286
50	0.538	0.122	1.530	0.655	0.326	0.296
51	0.475	0.134	2.170	0.625	0.364	0.254
52	0.537	0.179	1.730	0.587	0.389	0.415
53	0.480	0.174	1.790	0.578	0.404	0.326
54	0.520	0.146	1.720	0.651	0.354	0.345

表 T G-232号窯小型器種の分析値(1)

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
55	0.488	0.179	2.320	0.559	0.359	0.374
56	0.468	0.176	2.220	0.550	0.373	0.380
57	0.495	0.117	1.870	0.638	0.297	0.280
58	0.515	0.164	2.370	0.622	0.346	0.247
59	0.527	0.146	1.780	0.631	0.359	0.353
60	0.454	0.118	1.890	0.538	0.341	0.300
61	0.510	0.156	1.910	0.618	0.371	0.347
62	0.497	0.119	2.060	0.591	0.332	0.324
63	0.483	0.097	2.020	0.598	0.277	0.275
64	0.476	0.189	2.620	0.554	0.381	0.345
65	0.501	0.160	2.070	0.587	0.390	0.324
66	0.514	0.175	3.100	0.543	0.341	0.318
67	0.504	0.165	2.170	0.614	0.401	0.253
68	0.436	0.190	2.220	0.607	0.412	0.233
69	0.468	0.252	3.170	0.492	0.386	0.359
70	0.551	0.137	1.770	0.660	0.350	0.325
71	0.514	0.140	1.940	0.593	0.335	0.344
72	0.536	0.169	2.740	0.607	0.356	0.265
73	0.408	0.269	4.190	0.390	0.386	0.210
74	0.445	0.218	3.420	0.414	0.425	0.233
75	0.412	0.226	3.920	0.418	0.385	0.217
76	0.493	0.205	2.350	0.569	0.415	0.308
77	0.482	0.190	1.790	0.605	0.378	0.345
78	0.494	0.125	1.830	0.591	0.359	0.301
79	0.503	0.131	1.850	0.606	0.343	0.318
80	0.489	0.132	2.290	0.583	0.386	0.338
81	0.518	0.129	1.840	0.649	0.303	0.262
82	0.452	0.131	2.380	0.545	0.336	0.315
83	0.480	0.182	2.140	0.563	0.376	0.393
84	0.529	0.164	2.000	0.585	0.350	0.406
85	0.523	0.141	2.740	0.603	0.341	0.334
86	0.493	0.141	1.890	0.641	0.348	0.334
87	0.502	0.140	2.380	0.524	0.378	0.358
88	0.483	0.179	2.280	0.558	0.398	0.391
89	0.427	0.080	2.180	0.513	0.240	0.188
90	0.512	0.157	1.940	0.609	0.365	0.396
91	0.472	0.171	2.430	0.567	0.358	0.340
92	0.447	0.064	2.230	0.619	0.225	0.136
93	0.483	0.132	2.020	0.638	0.373	0.248
94	0.517	0.175	2.680	0.541	0.362	0.379
95	0.506	0.160	2.280	0.579	0.355	0.376
96	0.494	0.131	2.270	0.654	0.286	0.306
97	0.505	0.132	2.260	0.682	0.305	0.306
98	0.495	0.187	1.810	0.567	0.425	0.338
99	0.475	0.111	2.260	0.580	0.351	0.279
100	0.503	0.134	1.720	0.605	0.341	0.299
101	0.530	0.145	1.970	0.638	0.340	0.322
102	0.550	0.157	2.620	0.533	0.379	0.345
103	0.512	0.155	2.410	0.577	0.346	0.276
104	0.508	0.095	2.120	0.643	0.272	0.224
105	0.507	0.093	2.120	0.657	0.278	0.227
106	0.490	0.135	2.310	0.570	0.312	0.317
107	0.497	0.151	3.160	0.549	0.329	0.311
108	0.478	0.148	2.410	0.561	0.349	0.287

表 TG-232号窯小型器種の分析値(2)

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	
109	0.521	0.150	1.890	0.635	0.336	0.320	
110	0.420	0.152	2.330	0.495	0.357	0.178	
111	0.489	0.136	2.470	0.600	0.350	0.273	
112	0.522	0.183	2.990	0.527	0.351	0.359	
113	0.505	0.124	1.870	0.641	0.339	0.299	
114	0.491	0.195	2.480	0.567	0.395	0.361	
115	0.508	0.122	1.990	0.643	0.310	0.286	
116	0.519	0.135	1.810	0.644	0.346	0.301	
117	0.531	0.155	2.280	0.607	0.333	0.333	
118	0.505	0.150	1.750	0.571	0.373	0.355	
119	0.514	0.152	2.460	0.592	0.386	0.364	
120	0.506	0.137	2.040	0.630	0.340	0.266	
121	0.519	0.175	2.000	0.599	0.359	0.405	
122	0.470	0.130	2.080	0.619	0.322	0.244	
123	0.475	0.122	2.050	0.602	0.304	0.211	
124	0.458	0.123	1.610	0.556	0.356	0.313	
125	0.468	0.187	2.340	0.563	0.400	0.365	
126	0.495	0.137	2.390	0.619	0.330	0.299	
127	0.498	0.134	1.580	0.589	0.393	0.354	
128	0.520	0.162	2.050	0.605	0.355	0.385	
129	0.509	0.163	2.420	0.583	0.346	0.371	
130							試料量不足で測定不可
131	0.495	0.141	1.930	0.603	0.344	0.314	
132	0.492	0.112	1.740	0.627	0.313	0.271	
133	0.523	0.178	2.170	0.622	0.394	0.249	
134	0.542	0.228	1.740	0.608	0.502	0.427	
135							試料量不足で測定不可
136	0.510	0.137	2.450	0.649	0.303	0.262	
137	0.562	0.156	1.870	0.661	0.341	0.336	
138	0.541	0.121	1.790	0.686	0.332	0.265	
139	0.552	0.181	2.130	0.588	0.395	0.236	
140	0.540	0.117	2.100	0.644	0.336	0.250	
141	0.475	0.160	2.260	0.588	0.349	0.196	
142	0.508	0.118	2.020	0.656	0.338	0.264	
143	0.465	0.167	2.350	0.578	0.369	0.240	
144	0.527	0.195	2.170	0.601	0.412	0.373	
145	0.547	0.161	2.120	0.632	0.340	0.366	
146	0.479	0.163	2.230	0.605	0.356	0.193	
147	0.504	0.137	1.600	0.612	0.376	0.356	
148	0.470	0.185	2.090	0.614	0.421	0.271	
149	0.521	0.123	1.910	0.646	0.320	0.263	
150	0.521	0.138	1.910	0.655	0.313	0.323	
151	0.484	0.113	2.060	0.641	0.281	0.289	
152	0.491	0.122	2.120	0.622	0.310	0.282	
153	0.515	0.203	2.100	0.577	0.410	0.356	
154	0.515	0.199	2.190	0.565	0.377	0.348	
155	0.558	0.151	1.910	0.632	0.357	0.356	
156	0.562	0.140	1.630	0.640	0.353	0.338	
157	0.503	0.085	2.220	0.654	0.277	0.206	
158	0.535	0.164	1.890	0.623	0.355	0.341	
159	0.523	0.143	2.090	0.628	0.346	0.325	
160	0.500	0.099	2.030	0.648	0.296	0.248	
161	0.524	0.194	2.060	0.608	0.406	0.341	
162	0.541	0.123	2.020	0.624	0.330	0.238	

表 T G-232号窯小型器種の分析値(3)

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	
163	0.503	0.159	2.410	0.607	0.364	0.266	
164	0.527	0.143	1.890	0.654	0.343	0.271	
165	0.492	0.135	2.040	0.594	0.330	0.315	
166	0.543	0.139	1.980	0.621	0.327	0.352	
167	0.497	0.126	2.010	0.649	0.326	0.322	
168	0.552	0.137	1.970	0.605	0.373	0.339	
169	0.511	0.130	1.840	0.631	0.349	0.323	
170							試料量不足で測定不可
171	0.480	0.170	2.630	0.552	0.375	0.318	
172	0.490	0.160	2.170	0.556	0.407	0.278	
173	0.476	0.167	2.240	0.580	0.364	0.210	

表 T G - 232号窯小型器種の分析値 (4)

第Ⅷ章 結 語

大庭寺遺跡の発掘調査は、1986年に実施した試掘調査に始まり、1992年2月末日までの約7年間、継続的に行われた。調査報告書もこれまでに4冊が刊行され、多くの調査成果が公開されている。本報告書は第Ⅴ冊目に当たり、当遺跡の一連的な調査の最終報告である。主たる報告内容は、第Ⅳ冊で報告した最古型式の須恵器窯（TG232号窯）と同時期の初期須恵器窯（TG231号窯）、工人の居住域、初期須恵器が多量に出土した小開折谷、旧河川の調査成果である。ここでは、まとめとして、これらの遺構から得られた成果を再度記述しておく。

1. 初期須恵器窯（TG231号窯）は、窯本体部分は完全に削平されていたが、灰原を検出したことによりその存在が明らかとなった。
2. TG231号窯の灰原から出土した須恵器は、形態・技法的に陶質土器の特徴を色濃く反映させたものが数多くみられるなど、その特徴からは最古型式であるTG232号型式に位置づけられた。
3. TG231号窯の灰原の発見により、大庭寺遺跡では最古型式の須恵器を焼成した窯が少なくとも2基存在したことが明確となった。
4. この2基の窯については、灰原規模や灰原での遺物出土状況が異なり、窯規模や操業期間などが問題視された。窯規模の問題についてはいずれも窯本体が残存しておらず明確にできなかったが、操業期間の問題については遺物の形態から同時操業していた期間も存在した可能性が高いとされた。
5. 複数の最古型式の須恵器を焼成した窯の存在、TG232号窯の遺物量からは、大庭寺遺跡の生産規模が西日本各地の初期須恵器窯を圧倒した規模であったことがうかがえた。さらに、他遺構（小開折谷393-O Lや第Ⅳ冊で報告した1-O Lの土器溜まり）の出土須恵器からは継続的な窯経営もうかがえた。このような大庭寺遺跡の様相からは、陶邑の成立や発展過程の一端をうかがい知ることができ、わが国における須恵器生産開始時から陶邑は中央窯的な役割を担っていたと考えられた。
6. 第Ⅹ調査区やその周辺（I区E）で検出された竪穴住居・溝・井戸の出土遺物は2基の初期須恵器窯とほぼ同時期とされ、当調査区を中心とした場所が工人の居住域であったと推定された。

7. 小開析谷(393-O L)から出土した初期須恵器は、その多くがTG232号型式の範疇に属するものであったが、2基の須恵器窯にはほぼ併行すると考えられるものの他に、これらよりやや形態変化の進んだものも含まれていた。実際には発見されていないが、TG231・232号窯から継起的に連続する窯の存在がうかがえた。

8. 小開析谷(393-O L)では、出土した初期須恵器の中に灰原より焼け歪みの度合いの小さいものが含まれることから、2次的な選別が当谷周辺で行われたことが推定された。

9. 河川からは古墳時代後期の須恵器や土師器が一括投棄された状況で検出され、6世紀前半の良好な資料となった。

10. 今回の調査により、生産域(窯)や居住域(住居)が明確となった他、墓制の一端も明らかとなった。さらに、2次的な選別場や流通路(河川)なども推定され、陶邑における初期段階の「須恵器づくりムラ」のほぼ全容が明らかとなった。

以上、本報告書ではその多くが事実報告に終始した。そのため、大庭寺遺跡から派生する須恵器生産に関する多くの問題は未解決のままである。今後、多くの研究者によって大庭寺遺跡が再検討され、わが国の窯業研究がより一層進展することを期待する。

最後になったが本調査および本書作成過程で、ご教示ご協力いただいた方々の御芳名を以下に記して、謝意をしたい。

泉武(天理市教育委員会)、乾哲也(和泉市教育委員会)、植田文雄(能登川町教育委員会)、内田好昭(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、大竹弘之(枚方市教育委員会)、小田富士雄(福岡大学)、尾谷雅彦(河内長野市教育委員会)、神谷正弘(高石市教育委員会)、北野重(柏原市教育委員会)、木下亘(奈良県立橿原考古学研究所)、高正龍(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、酒井清治(駒沢大学)、白石耕二(和泉市教育委員会)、白石太一郎(国立歴史民俗博物館)、武末純一(福岡大学)、竹谷俊夫(天理参考館)、虎間英喜(岸和田市教育委員会)、永島暉臣慎(財団法人大阪市文化財協会)、西谷正(九州大学)、菱田哲郎(京都府立大学)、堀田啓一(高野山大学)、松井忠春(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、森村健一(堺市立埋蔵文化財センター)、柳本照男(豊中市教育委員会)、山田邦和(京都文化博物館)、吉井秀夫(立命館大学)〈順不同〉

報告書抄録

ふりがな	すえむらおぼでらいせき							
書名	陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ							
副書名	近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	朝大府府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	岡戸 哲紀							
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536 大阪市城東区蒲生2丁目11番3号 小森ビル4F 06-934-6651							
発行年月日	1996年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
おぼでら 大庭寺遺跡	おぼでら 大庭寺遺跡 おぼでら 大庭寺・小代	27201		34° 29° 58°	135° 29° 25°	大庭寺その6 1991,04 ～1992,02 大庭寺その7 1992,04 ～1992,07 大庭寺その8 1992,07 ～1993,03	4,402㎡ 1,336㎡ 2,554㎡	近畿自動車道 松原すさみ線 建設に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大庭寺遺跡	集落 生産遺跡	古墳時代 中期 古墳時代 後期	・初期須恵器窯に 伴う灰原、区画溝 土器溜り、井戸 土塚墓	・初期須恵器、 軟質系土器、 土師器、窯道具 ・須恵器、土師器		・灰原から出土した初 期須恵器はわが国最 古段階のものである。 ・陶邑における初期段 階の工人集落の構造 が明らかとなった。		

大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第10集

陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ

近畿自動車道松原ささみ線建設に伴う発掘調査報告書

平成8年3月29日 発行

編集・発行 大阪府教育委員会
財団法人 大阪府文化財調査研究センター
〒536 大阪市城東区蒲生2丁目11番3号
小森ビル4F
TEL 06-934-6651 FAX 06-934-7029

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所



※ 遺構番号は本報告のみ。他の遺構は『陶器・大庭寺遺跡Ⅰ～Ⅳ』で報告

付図2 大庭寺遺跡全体図2

